第44号

川越市医師会報

昭和58年10月1日発行

川越市医師会報　第44号

目　次　表紙題字――――――――――広　沢　輝　雄
表紙写真――――――――――西　川　幸　子

表　紙　の　写　真

先日，「世界はひとつ」のかわいいテーマソングのながれるファンタジーの場所，トウキョウ・デズニーランドへ三世代８人で遊びに行きました。18年前にロスアンゼルスのディズニーランドに遊んだときの感激を思い出しなつかしく，再び夢と希望にみちた楽しい一日をすごしてきました。

（写真　西川幸子）

米国の医療状況

12年間の経験

耳鼻咽喉科伊佐沼クリニック
時　田　信　博

はじめに

1970年―昭和45年5月東京羽田空港をたち，昭和57年1月に帰国するまで，12年間の私の米国での経験，インターンに始まり外科レジデント，耳鼻咽喉科研修医大学病院講師，更に当地にて開業に至るまでを振り返り思いつくまゝにここに書いてみた。

帰国後，生地の川越にて耳鼻咽喉科を開業し，保険制度を睨みながら四苦八苦生活をしていると，自然と米国と日本の医療の違いを改めて痛感してしまう。

私は日本の医療の欠点や過失を指摘し，批判するつもりでこれを書こうとするのではない。それは日本にも米国にもそれぞれ長所があり短所があるからである。すべて完璧という医療は有り得ないと思う。それにどうしても日本と米国との基本的な違いを念頭に置かなくてはならない。

1．米国耳鼻咽喉科専門医

耳鼻咽喉科の資格検査のため，設立されたAmrican Board of Otolaryngologyと言う組織がある。

これは1924年―大正14年，今から59年前に創立された専門医資格公認の機関である。これに先立って当時耳鼻科医と称する人々で，各分野に興味を持ち経験業績のあった者たちが集って米国咽喉協会米国耳鼻科学会，米国気管食道科協会，米国三科（耳，鼻，咽）協会，米国頭頸部外科学会，顔面形成協会等の学会もしくは協会が設立してあった。この中には百年以上の伝統と歴史をもつ学会もある。こういった人達及び学会がスポンサーとなって American Board of Otolaryngology ―即ち耳鼻咽喉科専門医資格検査をする組織が出来たわけである。

2．米国耳鼻咽喉科専門医の誕生

私のいた当時はまだインターン制度があり，医学部卒業後一年間行われた。その後一般外科のレジデントを一年乃至二年行う。何れも定員があり，良い教育病院では競争が激しく，一年毎にインターンから上に行く度に定員数が減るので，あまりのんびりしていると人員整理されてしまい，翌年から研修する病院が無くなってしまう。

私のように学卒後一年ちょっとで，それも卒業以前から学園紛争に巻き込まれてあまり勉強せず，日本にいた当時は国試ボイコットなどをしていた者が，いきなりミシガン州デトロイトの大きな教育病院（ヘンリーフォード病院）でインターンに入ると，それ相応の天罰が待っていたのである。

何と言っても英語の力がないこと，次に肝心の医学の知識が無いこと。この二つで臨床に携わる医者としては全く失格的存在であった。この時ほど自分自身に劣等感を感じた事は私の生涯になかった。これに対抗するにはアメリカ人の倍以上の努力をし，病院で働く周囲の人に好かれるようになる事が大切だった。当直が一晩おきに続き，当直の時はほとんど夜眠れる事がなかったので，翌日の一日勤務の後は疲れてしまって勉強する時間も力もなくなってしまっていた。現に入院患者の診療にあたっては，見る事聞く事すべてが新しい事のようで，一体私は日本での医学部四年間何を学んだのだろうかと，と思う毎日であった。

例えば病棟や救急室で，南部から来た黒人患者と話してもはっきりわからず，またこちらの言うことも相手はなかなか理解してくれない，お互にいらいらしてしまう。決められた時間内に患者を診て History と Physical を行い，カルテに書き込みそれ相当の検査を行わなければならない。じっと耐え抜くこの時ほど生存の厳しさを感じた事はなかった。

このように辛く苦しい毎日ではあったがスタッフ医師達は皆，根は優しい人達で意地の悪い事をしたり，理由も無く怒ったりしないで私にいろいろと実際の教育をしてくれ，質問をすると喜んで教えてくれた。また休みの時などには夕食やピクニックに招待してくれて，ホームシックにならないようよく気を遣ってくれた。そのうちに本当に辛さを忘れて新しいファイトの精神が湧き出て来るようになったのである。

翌年は外科のレジデントに残る事ができた。米国では産婦人科と眼科を除いて外科系統の専門科目の研修をするには，一年乃至二年間の一般外科レジデントをする事が必要とされている。

私のいた当時は眼科，耳鼻咽喉科泌尿器科，整形外科，形成外科等の専門科目の研修医になるには，かなり激しい競争があった。その理由はこれらの科目は専門医となると収入の面が良く，しかも時間的余裕，すなわち夜起こされたり不規則な時間であったりする事がなく，比較的快的な生活が出来るからである。外科を二年行って私は耳鼻咽喉科のレジデントになる事が出来た。

耳鼻科の研修期間は当時は三年間（現在四年間）であった。一年め二年め三年めと，カリキュラムが決っており，一年毎に試験も行われた。一年目は頭頸部解剖。これは大学の解剖学教室に一週間に二度行き，人体解剖を行った。これは六ヶ月続きその後は筆記口答の試験が解剖学教授により行われた。試験の結果は耳鼻科の主任教授の所に送られて評価された。その他細菌学，生理学，薬理学，病理学，側頭骨微細解剖学など耳鼻咽喉科に関係のある講義，実験，実習もあり，終了すると必ず試験があった。

もちろん患者の診療は毎日行われ，当直も三日に一度の義務があった。その他通信講座があり，それも終了すると試験が行われた。毎年度末には全米統一の耳鼻咽喉科筆記試験が実施され，その結果で翌年上の研修医になれるかどうかが決定された。

研修医は患者へのアプローチのしかた，ベッドサイドマナー，手術の技術合併症の処理のしかた，更には看護婦，レントゲン技師，検査技師，等の病院で共に働く人達との人間関係や振舞方なども直接間接に観察されて，その報告は主任教授の閻魔帳にメモされていった。

研修が終了時点でその個人の評価が主任教授から報告され，例えばDr.Xは，試験の成績はA，判断と評価はB，手術及び技術はC，会議の出席率はB，研究成果はB，性格及び人間関係はD，等評価されそれに基ずいて主任教授はその人の推薦状を書くわけである。この手紙は特に大切で，その個人の医師としての生命線でもある。もちろんこのような大切なものを書く上には，試験等のように点数で決まるもの以外はスタッフ医師と相談して公正に評価しているようである。

こうしてレジデントを無事終え，主任教授の推薦状を貰うといよいよ American Board of Otolaryngogolgy米国耳鼻咽喉科専門医認定の資格を受けられる事になる。

この試験の申請書にはレジデントの間にどんな手術を何例自分が執刀して行ったかを分類して，明細を書いて送り，手術件数が比較的あらゆる分野に亘って一様に行っているかを審査される。この時手術件数が極く少なかったり，偏ったりしている場合は試験を受ける事を拒否されたり，一年間延ばされたりする。それと同時にその不適格と思われた人の出身の研修プログラム，及び主任担当の教授は審査され，果たしてその病院が耳鼻咽喉科医を育てられるだけの患者数と能力のある Teaching staff がいるかどうか調べられる。

不適当と思われたプログラムは研修医公認からはずされてしまう。そうなると，その病院内で研修を認められなくなった科目の名誉は全く傷つけられるわけである。

一方，専門医の試験を受けられたとしても，多数の不合格者を出すプログラムも審査され，問題点を追求される。私の受けた専門医試験は1976年10月にシカゴで行われた。最初の日は筆記試験，翌日は口答試験であった。今考えて見るとこの時程緊張したことはなかったように思う。試験内容はかなり難しく，口答試験では緊張と焦りで，すっかり固くなり汗ばかり出てしまった。試験が終るとすっかり疲れが出て，しょんぼりしてしまった。やっぱりだめだろうな

あ，と思いつめてしまった。ニューヨークに帰り，しばらく無気力状態が続いた。だから二週間の発表で合格の通知を受けた時は天にも昇る心地だった。

私はその頃耳鼻咽喉科の研修を終っていたので，その上のフェローという形で病院で働いていた。

フェローとはレジデント終了後一年乃至二年間研修する制度で，耳鼻咽喉科内でのある一部の分野，例えば耳をさらに専門的に深く研修を受けるとか，頭頸部腫瘍の経験を豊かにしたり或いはリサーチだけをやるとか，各大学の状況により適当に選択できるようになっていた。そしてその間学術論文を発表する事が義務づけられていた。

フェローの給料は外部の一般の企業からの寄贈によるもので，論文発表という形で，目に見えた実績がなければ財政援助はすぐにキャンセルされてしまう。

3．大学の教育スタッフとして

翌年私は大学医学部の講師に任命された。常勤の講師になると，他の科の先生たち研究者その他いろいろな人々と知り合いも多くなり，研究や論文発表，学会参加等では大変有利な地位にあった。しかし収入面では個人開業医とは天と地程の差があった。

ある日，国際耳鼻科学会の案内状がアルゼンチンのブエノスアイレスから届いた。ブエノスアイレスはかねてから一度行ってみたいと思っていた所の一つであった。ちょうど書き終えた論文があったのでそれを発表すると言う事で，アルゼンチンへ行けばよいと思って早速学会参加の申し込みをしてしまった。

数週間後論文がまとまったので主任教授に会いに行き，私の国際学会参加の旨を告げた。私の主任教授は Dr.Dalyと言い，米国耳鼻科学会の会長であり，また米国喉頭協会の理事長でもあった。

その数日後私は教授に呼ばれた。彼はこの論文は内容がよいから国際学会等には出さないで国内の学会で読んでもらった方がよいと思う，と言った。大切な論文や発表は必ず国内(米国)の学会ですべきであり，外国主催の学会はあまり重要視されないとも言われた。

私はかねてから国際学会の方が全世界の人々に発表するようで，意義があるのではないかと思っていたのだが，それがこゝですっかり覆えされた。

その後国際学会の案内状をうけとるたびに，どこの誰が発表するかを注意して見ていると，かなり日本からの出題が多かった。それに反して米国内での耳鼻咽喉科関係の学会の演題を見ると日本からの発表はほとんどなかった。しかし英国，スウェーデン，オーストラリア等からの演題は比較的多かった。

私の知人で英国の耳鼻科医は良い論文ができると必ず米国の学会で発表するようにしている，と言っていたその理由は米国の学会が現在では最も国際性があるからとの事であった。科学に国境はないと言うが，日本人医師及び日本の医学を国際舞台に移して観察してみると，果たしてどれだけ注目されているのだろうか。一見明白なことは彼等に国際性が無いと言う事である。

私の友人の米国人整形外科医が日本の学会に参加した。帰国してから私に次のように言った。「日本は発展して全くすばらしい国だった。町はきれいだし人々はとても親切だった。ただ学会では日本人医師と全くコムニケーション出来ないのにはいらいらしてしまった。一見日本ではすばらしい医療をしている気がするが，とにかく彼等の言っている事が深く理解できない。他のどんな国に行っても，あれほどコムニケーションの困難な国はなかった」と。

経済面では日本は世界でも有数の大国と言われているが，臨床医学ではどうなのであろうか。私にはまだまだ先の事のように思われる。

例えば，米国でも欧州でも医学雑誌を読んでみて，日本からの臨床の論文がどの位でているだろうか？日本からの研究は基礎医学の方が多く臨床家にとっては興味のないものばかりである。私は日本のある分野ではとても優れていると思うし，日本人は勤勉であり，優秀な人も多い。それなら何故もっと国際的に一流になれないのだろうかと思う。これは日本の医師研修医制度，医療行政に欠陥があるのではないだろうか。

私のいたニューヨーク大学では，たぶん他病院も同じとは思うが，ティーチングスタッフと言われる人達は，研修医から一体どの位専門教育に貢献しているか，と言う評価をうける研修医は各々投票用紙に，この先生はすばらしく貢献している，とか普通よりは良い，普通，普通以下，更には価値なし，と言う五つのランクに分けて投票する。これで普通，普通以下の評価をされると教育者としては下適当とみなされ，ティチングスタッフの教育委員会に取り上げられる。大学に教育者としている限り，その義務と励行を強く要求される。要するに米国では学生や研修医だけでなく，専門医の資格を持った一人前のティーチングスタッフでも彼等と全く同様常に厳しく観察され，評価されているのである。

4．開業について

日本では開業すると大学とはあまり関係なくなり，小さな一城の主になってしまって，大学の先生からも世間の人々からも，何か二流クラスの医師と言う目で見られる。こういうことはアメリカでは全く考へられないことだ。

米国では大多数の研修医が修了後は個人，または協同開業する事を希望しており，大学にティチングスタッフで残る人も，将来良い場所や条件で開業できるまで待つためにいると言うのが大部分であった。

アメリカで開業する場合，その州で医師免許を得た医師はその町の病院のスタッフメンバーになる申請をする。病院側は資格調査委員会がその申請書を受け取り，厳密に調査を始める。この委員会は申し込みのあった医師の過去を徹底的に調べる。その医師の研修した病院の主任教授やティチングスタッフなどととも連絡をとり，ありとあらゆる情報をその医師に関して集める。専門医資格はあるか，その専門学会の正会員かどうか，もし研修を終えて数年経っていれば米国外科学会，もしくは米国内科学会の正会員かも問われる。勿論こういった学術団体の正会員であればずっと有利であることは言うまでもない。

専門科の学会や学術団体はアメリカでは，ただ会費を払えば誰でもなれると言うものではない。例えば耳鼻科学会の正会員になるには，耳鼻科の専門医資格を経て一年以上経ち，正会員三人（その内主任教授一人）の推薦状が必要であり，その翌年理事会で決定される。米国外科医協会即ち，A.C.S の正会員になるためにはもっと厳しい条件が必要である。

ある科の学会，協会は，その会の正会員になる為にはそれに関する論文を提出し，著明な医学雑誌に受け入れられる事を条件とするものもいくつかある。専門医の資格があってもそれだけで満足するのではなく，更に研究，勉強をして医療の向上を計るというのがこのような学術団体の目的なのである。

話しは戻って病院側はしばらくの間調査し，その医師に資格経験ではどの程度，或いはどの範囲の仕事，手術などがその病院で可能かの許可を与える。一般的には初めは仮免許を得て，その後すでにスタッフとなっている医師の観察下にいくつかの規定の手術や診療を行い，更に病院内の会議などに参加して，次第に知れわたり，適切な医師と認められゝば数年後正式のスタッフになれるわけである。

この課程は誰であろうと，例えば大学の教授をしていたような業績のある著明な人物でも全く同様に扱われ，以前教授をしていた者，著明な人物が開業して病院にスタッフの申し込をした時も，名もない町の開業外科医がその教授の教授の行う手術を監視すると言う事になる。

さて病院からスタッフになる許可を得た医師は患者を入院，手術，検査する為に病院に送れるわけである。一方，医師は町に外来の診療所を持ち，ここで患者を診療する。耳鼻咽喉科の場合専門科目であるので患者は他の医師から紹介されて来る。例えば耳が痛いとか咽がいたい等の時は最初はプライマリーケアの医師の所に行く。プライマリーケアーと言っても家庭医であったり，小児科医であったり，かかりつけの一般内科の医師であつたりすることもある。急性中耳炎，急性扁桃炎等のようなよくある急性上気道炎は彼らが治療処置してしまうことが多い。

耳鼻咽喉科専門医の所に直接このような患者が来ることはまずない。耳鼻科的手術が必要と思われる症例，困雑な症例で詳しい診察検査を

要する時には紹介状で耳鼻咽喉科に送って来る。送られた耳鼻科医は万全を尽して良い医療を行うように努力する。例えば手術して結果が悪かったり合併症を起したりすれば，紹介される患者の数は悲劇的に減ってしまう。それは紹介したプライマリーケアの医師も結果的にはその患者に非難されてしまうからである。その為にも医師，特に専門医は卒後教育を自ら心がけておく必要がある。

医療の世界は常に新しい学説，治療及び診断法が日進月歩の状態なのでそれ等を常に勉強して，現代の医学におくれないよう習得しておく事が必要である。その為にはかなりの読書時間，研修会，学会参加を必要とする。最近では州政府がこれを義務づけにし医師開業免許の二年毎の更新の際，卒後教育を60時間以上何らかの形で証明しなければ更新出来ない州が増えてきている。勿論これらの卒業教育は研修会でも学会参加でも費用がかゝるが，全部必要経費として税金の対象額から免除される。

米国では医師の診察室をオフィスと呼ぶ。そのオフィスには高価な設備や機械は個人では投資しないで，その様な機械を使用して熟練した医師や技師がいる病院や他の医療施設へ患者を送る事が多い。すると正確な診断をつけて患者を送り返してくれるので送った開業医も勉強になる。そして高額な投資をしなくても十分やってゆけるのである。

耳鼻科医の初診料は39ドル(10140円)。同じことが日本では保険制度でそれぞれ1200円である。米国では医師なり，聴覚学者，または聴覚技師が聴力検査を行うと70ドル（18200円）日本では2400円。鼓膜切開が60ドル（15600円）日本では1100円，顕微鏡を使用しても2200円である。病院での扁桃摘出術が400ドル(100400円）に対し日本では19000円と余りにも医療費の格差が激しい。鼓膜形成術は2200ドル（572000円），日本では166000円となっている。経費の面では人件費以外はすべて米国の方が安く，日本ではすべてが経費高となってしまう。

米国では外来患者はすべてアポイント制で一人当り15分—30分位の時間をかけて診療する。これ以外に手術費その他の収入があるので生活には普通は困らない。その反面医療事故，医事紛争にはすさまじいものがある。余りにも激しい医事紛争の増加の為にこのまゝではいけないと医師会で強くかんじ，医師の個々の能力を向上させて自己防禦をさせようという目的で，厳しい卒業教育を行うようになった。その結果どんな小さな離れた町で開業していても卒業教育はしっかり出来るようになっている。

耳鼻科の医療事故保険料は大体年間で14,000ドルから22,000ドル位（300万円から570万円）である。この医療事故保険に入っている事を開業の際に義務づけている州が大部分のようである。

5．日本での開業

十数年間米国で研修し，最後の数年間を当地にて開業してから日本に帰国して開業してゆると，ありとあらゆる障碍にぶつかる。

こゝでの開業医は卒後教育等の勉強制度がないので，最新の情報医学に追いついて行くことが困難である。開業医はいわゆる町医者で一流の医師ではない，という世間の人々及び大学病院にいる医師達の考え，大きな手術または詳しい検査等の依頼に，大病院や大学病院に送る事が難しい患者を送ってもその後どうなったのかわからなくなってしまう。つまり閉鎖的なのである。

更に医療報酬が極端に低いこのことも大きな問題である。医療費が安いという事は間接的には人間の生命が日本では安いという事と同じように思われる。

例えば虫垂炎の手術費を各国別に主に産業国を調べてみると，日本だけ極端に安い。一方生活費の方では日本が一番か二番に高い。

このような状態では日本ではかなり多くの患者を診療して忙しくしていなければ，経済的に参ってしまう。そのかわり患者への教育，コムニケーションの面では大変貧弱なさせざるを得ない。よい診療をしようと思ってもなかなか時間と余裕が与えられない。その結果多数の患者が犠牲となってしまう。

一方医師の方としては各々一城の主なのはよいが何もかも一人でする為，忙しくなり精神的にも肉体的にも疲れ果て，卒業教育のことを考

える時間も体力も，あげくは精神もなくなってしまいつゝあるのである。自分を省みてこんな状態ではいけないと，しみじみ考えてしまう。果して日本の医療はこのまゝでよいのだろうか。

時 田 信 博　米国耳鼻咽喉科専門医
米国外科学会正会員
米国耳鼻咽喉科学会正会員
英国王室医学会会員

卒業50周年クラス会

栗 城 至 誠

北大での同級生長野泰一君は予科時代には机を並べて勉強した仲であった。彼は大変な勉強家で卒業して間もなくパスツール研究所に留学，細菌学を研究。帰朝後伝研に入り，東大教授となり，今は名誉教授である。インターフェロンを世界で最初に発表したのも彼である。

一昨年恩賜賞をいただき，学士会々員になった。その時東京方面の同級生が集って祝賀会を東京で開催した。その席上久し振りだが札幌でもクラス会を開くよう幹事に依頼する。

私達は昭和7年の卒業であるので，医学部七期生ともいう。ラッキーセブンの言葉にあやかるつもりか，昭和57年7月7日に札幌の第一ホテル新館に集る。私は数え年で77歳である。

昭和7年の卒業時には69名であったが，この時の生存者は29名である。そののちまた，2名死亡する。上級生よりも死亡率が高い。予科時代は元気がよい腕白者の集りであった。いたずらが過ぎて夏には教師のチョーク箱に蛇を入れておいたり，冬は教壇の上の天井に雪を打ちつけておき，何分かたつと，天井から雫が滴るようなたわいないいたずらをしたこともある。

死亡率が高いのは若い時張り切りすぎたせいかとも思う。

そんなわけでクラス会に出席したのは11名だけで欠席した同級生は皆老人病で身体のどこかが悪い。ねたきりのものもいるだろうし，附添がなければ歩けないものもいるだろう。まことに情けない有様である。

しかし集った連中は夫人同伴が多く，皆元気がよい。

「やあ，久し振りだな，元気のようだなあ，よかったなあ。」と言いあう。

自分もよく年の割に若いとはれるが，どうしても10歳くらい若く見えるのも1人いる。集ったものはそれぞれ仕事もしっかりやっているようである。

恩師大野精七先生にご出席していただく。96歳のご老体であるが，大変なお元気である。北大教授時代に始めてスキーを習得され，大学のスキー部長もおやりになり，日本スキー界の大御所になられて，冬期オリムピックを札幌に迎えたのも先生のお力によるところが多い。オリムピックのお陰で札幌市の得た利益は莫大である。

大野先生は東日学園大学学園長であり，島松ゴルフ場の社長も兼ねておられる。ゴルフは週2回はハーフだけプレーされるそうである。同級生のうちゴルフに熱心なのは私だけである。

お前は大野先生の側に坐れといわれたので，お話相手になったが，「先生ゴルフのスウィングをして見せて下さい」と申上げたら，気軽に起立してスウィングの格好をして下さる。吃驚するほどお若い動作である。

その上若返り法だといって，やたらに手足や頭を動かす先生独自の体操を披露される。

大野先生は少し早目にお帰りになられる。

そのあと同級生同志の話が弾む。卒業してから半世紀のつもる懐旧談に花が咲く。「めぐる盃夜も更けて北斗傾く玻璃の窓……」は寮歌の一節だがそれに相応しい状態の再現である。一同例によって「都ぞ弥生の雲紫に，花の香漂う宴の筵……」と若返って変声を張り上げる。

ホテルは幹事の知り合いである。北海道の山海の珍味が出る。心のこもった料理，昔食べた懐しい料理，当夜のビールは特においしい。われ等はサッポロビールで酒の味を覚えたのであるからである。

当夜は札幌居住の同級生もホテルに泊ってくれる。

翌朝は一諸に朝食をすませてから，それぞれ帰宅することになる。10年後の60周年のクラス会はおそらく開催することはないであろう。

私の場合，今度の旅行は夫婦同伴である。順序は逆になるが今回の旅行の出だしから記述すると。7月3日午前10時20分羽田空港を発つ。昨夏は関東地方は冷夏で，初夏だというのにうすら寒い毎日の天候である。合着の姿で羽田で飛行機に乗る。北海道の夏はよく知っているつもりなので相当に防寒の用意をする。夫婦共に未だ行ったことのない利尻や礼文に行ってみようと相談した結果の旅行である。

午前11時45分千歳に着く。昼食をとってから12時55分発の飛行機に乗り換えて稚内に行く。空から見る旭川辺の田甫は青々としている。稚内に着いたのは午後2時である。

空は晴天で空気は乾燥して気温も高く暑いくらいである。札幌に7年間を過し，7月になっても寒い日がありマントを着て戸外を歩いたおぼえもあるが，今回は北海道と本州の気候を入れ替えたような感じである。北海道は毎日暑過ぎるようである。日中30℃以上もある。

稚内に着いた時間が早いのでさろべつ原野に行くことにする。タクシーをやとう。途中は丘陵地帯でなかなか広大で一見荒野のようだが大体は牧場に使われているようである。人口も少く過疎地である。車数の疎らな国道40号を南下する。道路はよく整備されている。約40kmドライブして温泉のある豊富町の地区にある原生花園に到着する。ツンドラ地帯であるので荒寥として淋しい。湿地帯のわけだが草原が乾燥している。可憐な花がちらほら咲いているに過ぎない。中心地にバラックのレストハウスが数軒あり，茶店や土産屋である。何かお祭りでもあるのかパトカーも駐車している。この地区は利島や礼文と共に一つの国立公園として指定されている。同じ道路を稚内に帰る。それからノシャップ岬や水族館を見学する。

ホテルに着く。小じんまりした綺麗なホテルである。サンホテルという。大変感じがよい。喫茶室の赤煉瓦の内装がとても気に入った。すぐそばに稚内港や稚内駅がある。

ある魚料理屋に入る。ノシャップの味を満喫する。酒は地酒である。久し振りに北海道の魚の味に舌鼓を打つ。名も知らぬ魚をあとからあ

とから目の前で料理してくれる。ゲテモノが多いのでどうかと思ったが家内も結構よくたべる。客は未だ私たち夫婦2人だけである。夜半の客で賑っている店かも知れない。

翌朝7時利尻行の船に乗る。海上は静である。約2時間で利尻島鴛泊港に着く。早速タクシーを頼む。利島を一周する。島の中央に標高1719mの利尻富士がある。美しい姿をしている。その裾野は海岸である。海岸の道路を左廻りにドライブする。頂上辺に白く輝く雪渓が山の風景を引き立てている。

この原稿を書いている時丁度西田敏行がNHKテレビに出て「最北の海と人情」が上映された。鴛泊の旅館内で108名の料理を汚い手で手伝っている。あの料理を食べるお客さんは気の毒だと思う。映画では利島周囲60kmのサイクリングもやる。姫沼の観光について語るのを聴く。

私達の車は前進するに従い海岸の風景が絵のようである。えぞきすげや名も知らない白い花が岩上で海風にゆれている。途中姫沼の売店で巻貝の焼いたのを食べたが磯の香が味を一層引き立てる。

鴛泊に戻ってある料理屋で昼食をとる。雲丹飯を注文する。雲丹に目のない家内はとてもおいしかったから雲丹飯のことを書けという。獲

れたばかりの新鮮な味が忘れられないという。

午後2時45分再び鴛泊港で乗船し，3時35分礼文島南端の香深港に着く。なかなか良い港で礼文島から見る利島富士は印象が深い。

香深のホテルは三井観光ホテルである。ホテルから見た防波堤や燈台や利島富士の夕影を心ゆくまで眺める。青き空に透き満月がかかる。これも寮歌の一節である。

翌朝ホテルに頼んでおいたタクシーが来る。礼文一周の約束である。

またもや海岸線に沿って走る。奇岩怪岩が聳り立ち，青空は澄み切って紺碧である。たゞ少々風が強い。民家の庭には濃い紫のルピナスの花が風にゆれている。礼文島最北端のスコトン岬に行く。岩間には間宮海峡の荒波が押しよせて砕ける。樺太が近いという。大東亜戦争の悪夢を思いおこす。

有名な桃岩は西風が強い。吹き飛ばされそうになる。可憐な高山植物が数知れず咲いている。地面に咲いているエーデルワイスを久し振りに見る。

礼文は昆布，あわび，うにの宝庫であるという。島を一廻りして香深に戻る。

帰りの船に乗る。楽しかった両島をあとにして船は恙なく稚内に着く。

稚内駅発午前11時55分，天北線廻り急行に乗る。オホーツク海を左に見て列車は進む。空は晴天，気温はやたらに高い。冷房設備のない急行列車である。室内は40℃位はありそうである。羽田で寒かったのにまるで逆である。フェーン現象か何か知らないが，私が北海道で経験した最高の温度であろう。音威子府あたり，鉄道の左右に見える白樺がやたらに高木に感じられる。高さは20m位はあるようである。地味が合うのだろう。寒い北海道に適しているのだろうが白樺がこのように高いとは思わなかった。白樺の

林を両側に眺めながら列車は旭川市に到着する。バスで層雲峡に向う。途中雪渓のある大雪山がはるか前方に見える。しばらくこの辺に来ていなかったが市街も田舎も大層よく開発されている。層雲峡に来るのは三度目だが，その間にカリフォルニアのヨセミテ渓谷を見ているので層雲峡が小さく見える。スケールの小さいのは如何ともしがたいだろうが，日本では第一級の渓谷であろう。

層雲峡観光ホテルに宿泊する。

翌朝早くロープウェーとリフトを利用して黒岳登山を試みる。リフト終点の店でゴム長靴を借りる。雪渓は普通の靴で登るのは容易でない。

天気は大変よい。雪渓は例年より大きいそうである。毎週ゴルフで足を鍛えているのでこの位の山道は平気である。5年前夫婦でヒマラヤに行った時は家内の方が強かったが，今度は家内の方がフーフー言って登る。一時間半位で頂

上に行けるのだ。途中の草むらには高山植物のいろんな種類が一斉に咲き競っている。黄色い花が多いが青空の下で一層美しく見える。あちらこちらに黒百合が群をなして咲きほこっている。

一時間半も登ってあっと驚くほど前方が開ける。黒岳の頂上に着いたのである。

パノラマ写真を撮ったが横に長すぎるので会報に載せることができるかどうか。大雪山の全貌を一目に収める事ができて夫婦共大いに満足する。軽い足取りで山を降りる。

下山してから層雲峡を散歩する。もう一夜層雲峡に過していよいよ札幌市1条西11丁目の第一ホテル新館に到着する。荷物をホテルにあずけて北大へ向う。大学構内の建築物が多すぎる。札幌の自然を壊している。

50年前には学内を流れる小川には春は水芭蕉が咲き，秋には鮭が上ってきた。自然そのものだった。ポプラ樹も太くなった。植物園にも行く。植物園は昔と変りがない。

札幌の帰途桑園にできた中央卸市場に立ち寄り，土産の鮮魚や乾物を買う。午後千歳空港で飛行機に乗り無事帰宅することができた。

尚，昨春大野先生は胃癌になられ，進んで手術を受けられ暫してご逝去になられました。

合掌いたします。

カナダ旅行記

村本俊郎

カナダは見たいと願っていた国の一つなので，また日通航空の募集に参加した。勿論日本の27倍もあるカナダのバンクーバー付近のごく一部をみるだけではあるが。

8月7日午後4時半，成田に集合してみると，70歳を越しても元気な坂本先生，適齢期の娘さんをつれた山田先生夫妻，副島先生夫妻，私共の計8人の小人数。この種のツアーは最少催行人員が決っていて，確かこのツアーも15名であったと思ったが，ちゃんと添乗員がついて何をするにもまとまりがよく，集合時間に遅れるといったことは1回もなかった。

午後6時45分発のカナダ太平洋航空のジャンボ機で炎熱日本列島を後にした。

8月7日(日)

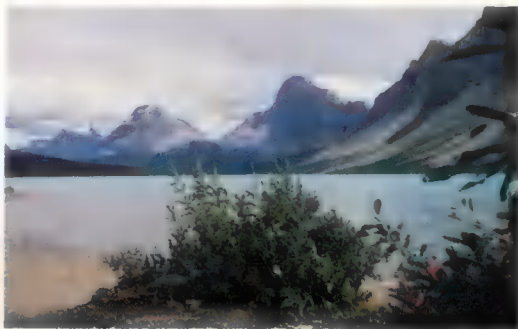
バンクーバーは今日が7日の日曜日。時差16時間だが夏時間なので17時間。

午前11時半到着。快晴。やはり東京に比べるとかなり乾燥していて涼しい。機内アナウンスでは23℃と言っていた。2時間の待合せで再び飛行機でロッキー山脈を越えてカルガリーへ。飛行機も少し小さくなり，よく晴れているので白雪を頂く連山や沢山の湖沼がみえる。

カルガリー着午後4時。カルガリーはさらに1時間の時差がある。空港で待っていたのは20歳ぐらいの金髪のたくましい娘さんの運転するマイクロバス(10人乗)。彼女はアルバイト学生のようだが，トランクを屋根に積む時など均整のとれたすばらしい肉体美をみせる。

バンフの町

平野部のカルガリーから，ロッキー山中の町バンフへ国道1号線を走る。片側三車線の高速道路だが，日本より車線が広いので走っていてもゆったりとした感じだ。

6時バンフのマウントロイヤルホテルにつく。まだ陽が高い。日が暮れるのは10時だと言う。ホテルの設備はまずまずだが西日を受けて少し暑い。ただ水道の水はものすごく冷たくてうまい。早速水割りを作って楽しむ。大きなロブスターの夕食後散歩に出る。小さな町でカスケード，ランドル，サルファー，ノーケイなどの山々に囲まれ，スイスに似ている。

途中立寄った湖

8月8日(月)

7時半，昨日より少し大きいマイクロバスで，コロンビア大氷河見物に出発。運転手兼ガイドは星野さんと言う日本の男性で，スキーを教えに来て永住権を得たと言う。(スキーは相当な腕前だろう，ゴルフも上手のようだ。)晴れだが少し雲があり，大部涼しくガイドさんは暖房を入れましょうかと言う。それ程でもない。

国道1号線を北上途中レイクルイーズに立寄る。こゝは明晩泊る予定だが，天気が悪化すると見られなくなるので寄ってゆくと。お城のよ

雪　上　車

うな大きなホテル，湖のはるか向うに大氷河。評判通りの美しい湖だ。

国道1号線にもどるとすぐ右に別れ，ジャスパーに向う国道93号線に入る。ヘクター湖，ボー湖，ペイトー湖など多数の湖が次から次へと

コロンビア大氷河

美しい姿をみせてくれる。11時ジャスパーに近いコロンビア大氷河の前につく。

軽食堂でサンドウイッチ，スープ，果物など好きなものを選んで出口で支払って席につく。1人10ドルぐらい。上着を着て丁度よい。観光客はかなりいるが，日本に比べると少い。

12時半，別のバスに他の観光客と共に乗り，1km程登った所で雪上車に乗りかえる。ものすごいタイヤだ。これで急坂をのろのろと下り，氷河の真中に出る。氷河に降り立つと氷は青みがかってよくすべり，あちこちちょろちょろと水が流れている。二口三口のんでみるが冷いたけで変った味もしない。氷河の奥は，はるかにつづいて少しづゝ動いていると言う。

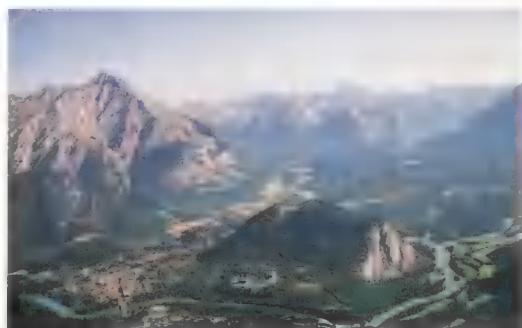
こゝから引き返してもと来た道をバンフへ。途中夕立に会ったがすぐ晴れた。ローストビーフの夕食はまづまづだった。

8月9日㈫

今朝は雲一つない快晴。今日はレイクルイーズへ出発する午後4時まで自由行動。夫妻共にゴルフをする副島先生の他はサルファーマウンテンに登ることにする。

サルファーマウンテンの頂上

ホテルの前から9時10分発のバスに乗る。バス、ケーブル往復切符が11ドル。有名なバンフスプリングホテルに寄って10分程でケーブル乗り場につく。4人乗りゴンドラで大して待たずに乗れる。頂上からの眺めはすばらしい。カスケード，ランドル，ノーケイなど近くの山々から雪を頂くロッキーの連山が視界の届く限り見渡せる。眼下にはバンフの町スプリングスホテル，ホテルからボー川に添って広がる有名なゴルフコース。あとできいた所，副島先生夫妻と添乗員はスタートを予約した処5時しかないと

言われて打っぱなしの練習場で一汗かいてあきらめたとの事。(5時スタートでワンラウンド出来るそうだ。)

サルファーの頂上からバンフとボー河

さんさんと陽がふりそそぎ半ソデで丁度よく，歩き廻ると汗ばむ。展望台の中の軽食堂でサンドウィッチ，スープ，ジュースの昼食をとりながらゆっくりと展望を楽しむ。午後1時下山しスプリングホテルでバスを降り，ホテルの裏へ廻りゴルフコースのスタート地点を横切ってボー川の川岸に出る。山の上から白くみえたのはボー滝と言う瀬のような可愛らしい滝で，こゝ

ボ　ー　滝

からバンフの町まで1km余りを散歩したが木蔭に川風が涼しく，のんびりしたひとときでした。

4時半金髪の女子大生のマイクロバスでレイクルイーズへ。昨日見たお城のようなホテルの三階。湖に面してよい室だ。夕食は大きな紅鮭にマヨネーズをかけたもの。半分も食べられない。味もも一つ。夕食後湖畔を散歩。家内は一人で湖の奥まで行ってビーバーとなき兎に出合ったと言って大喜び。バンフの宿は少し暑い感じだったが，このホテルは夕風がつめたい程涼しかった。大きなホテルであったが満員のようだった。

8月10日(水)

快晴。今日は列車でバンクーバーへ向う予定で，出発時間の12時45分迄自由行動。

近くのホワイトホーンと言う山にケーブルがあるので，坂本先生と行ってみようと言うことになったが，私はバスの運行が心配であった。添乗員にバスの運転手にきいてもらった所，時間的に無理ということで中止。このくらいの会

レイクルイーズ

話が自分でできるといいんだが。

湖畔の林間を登ってマイナーレイクと言う池まで往復2時間のハイキング。樹間から湖や氷河がちらちらみえるし，足もとには可憐な草花そしてよく栗鼠に出合った。

12時，ホテルの食堂でサンドウィッチとビールを注文したがサンドウィッチは間に合わなかった。給仕の女の子は「Very Busy」と言って，つんとしてそっけない。幸い昨日添乗員が列車の中でつれづれに食べるものを少し買って行くようにとの話があってチーズクラッカーやハム飲みものを持っていた。

バスで10分で素朴な駅につく。駅舎のみで周囲に何もなく駅員も見当らない。列車は大部おくれているらしい。退屈しのぎに外人と話してみるが，こちらの言うことは何とか通じるようだが相手の言うことは，ところどころしかわからぬ。その上英独ごちゃまぜでしゃべってしまう始末で長くはつゞかない。

30分おくれて午後2時，長い1日1本の列車が到着した。16輌編成の新幹線より長い列車の中央部の寝台車に来る。専用トイレ洗面所つきの二人用コンパートメントはゆったりした椅子で，乗り心地は満点。西ドイツのラインゴール

マイナーレイク

ドより速度はおそいがのり心地はこちらが上。ウィスキーをちびちびやりながら，車窓の景色をたのしむ列車の旅は大好きだ。飛行機は移動を目的とした幽閉に近いがこういう列車はそのものが旅情だ。

5時半夕食。ステーキと魚料理のいづれか，と言うので家内と一つづつ注文して半分づつ食べてみたがあまり美味とはいえない。寝台車へ帰ると車掌が来て，アッと言う間に二段ベッドを作り上げた。50セント渡す。サンキューとは言うけれど当然と言う態度。ベッドは広くてよくねられた。薄暮の頃どこかしら長いこと停車し，乗客は外へ出てぶらぶらしていた。のんびりしたものだ。

レイクルイーズ駅

8月11日(木)

バンクーバーは曇りで雲がひくく降り出しそうな空模様。のんびりした列車は約2時間のおくれで9時到着。日本女性ガイドのついたバスが待っていた。

まづ街の中心にあるホテルハイアットにゆき朝食（バイキング）次いで市内観光へ。バラード入江に突出した半島のような市内第一の公園スタンレーパークからライオンズゲイトブリッジを渡り，カピラノ渓谷に入り鮭の孵化場を見学したり，よくゆれる長いつり橋を渡ったり。こゝから引返し南下してクィーンエリザベス公園へ。花壇は見事である。

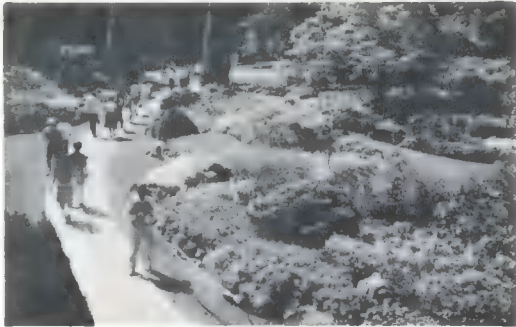
ホテル近くのチーナという海産物土産店で解散。鮭のくん製などみやげを注文してから市内を散歩し百貨店などみて廻る。夕食はタクシーでヨットハーバーの前のレストランへ行く。タラバガニが出たがあまりうまくない。副島先生夫妻はこの日はラウンドしたとのことで夕食にはみえなかった。

つ　り　橋

8月12日(金)

今日はまた快晴となる。石井さんと言う40歳ぐらいの男性が運転手兼ガイドで，マイクロバスでバンクーバー島にあるブリティシュコロン

ビア州の州都，ヴィクトリア観光に出掛る。

7時半ホテルを出て南下40分程で桟橋につく。8時半発のフェリーに乗り，約1時間半瀬戸内海のような島々の間を縫うように走るので大変景色がよい。釣り舟も多い。日本人観光客が目立つ。「ルック」で来た人は往復共私達と同じ飛行機でほとんど同じ所を廻りながら，トロントまで飛んでナイヤガラを見て来ている。彼等は強行軍，我々はのんびり。

ブッチャートガーデン

シュワルツベイと言う所で上陸。直ぐにブッチャートガーデンに行く。これはセメント成金ブッチャート氏夫妻が石灰石を採掘したあとに世界中から集めた樹木草花を植えて庭園としたもので，今は花の盛り。まさに花・花・花。昨日のクインエリザベス公園の何倍何十倍という花には圧倒される。只日本庭園もあって真赤な鳥居や石灯籠を配した池が造ってあったがこういう場所には如何にもなじまない感じ。

車はビクトリア大学の広大なキャンパスを左手にみて，海岸に出てアップランド公園に入る。高級住宅地で広い敷地に大きな住宅。こんもりした樹木とスプリンクラーをそなえた手入れのよい芝生ガレーヂには大型車，小型車，キャン

キャンピングカー

ピングカー，或はボートを引く車など豪華さは溜息が出るばかり。キャンピングカーはよほど好きとみえ道路といわず観光地といわず何処でもよくみかけた。

海岸線を南下してマリンパークのレストランで食事。よく晴れて日射しがつよく乾燥しているのでビールや冷いワインが実にうまい。ヒラメの切身で小えびを包み込み，むし焼にしてクリームソースを掛けたものが出たが，今度の旅行で一番おいしかった。

午後は海岸線をぐるりと廻ってビクトリアの中心街に向ったが，岬にあるビクトリアゴルフコースでは紺青の海を背に，濃緑のコースで気持よさそうに大勢プレイしていて何ともうらやましかった。

中心街で州議事堂その前庭に立つビクトリア女王の銅像，ミニチュアワールドなどざっとみて5時発のフェリーで8時帰着。

ホテルの夕食はステーキだが薄くて硬くてまづくて皆食残した。ハイアットと言うホテルは

州　議　事　堂

最高級の部類に入っていて，部屋の設備など悪くはないがどうしてこうも料理がまづいのだろう。この種のツアーは全部でいくらで払込んでいるのでホテル代がどうなっているのか，室代が高いだけ食費を落しているのだろうか，よくわからない。チャイナタウンあたりに出掛けて食べる方が利口なのだろうが，団体旅行では仕方がない。チーナで買った鮭のくん製でジョニ黒を飲みほした。(いつも出発のとき免税店でジョニ黒一本買って行く。これが1週間ぐらいの寝酒に丁度いい。)

8月13日(土)

快晴。今日はもう帰国だ。34階の展望台食堂

でバイキングの朝食。これはまあまあ普通。食後，家内は街へ出掛けたが私はもうたくさん。11時の出発までねていた。

14時発のカナダ太平洋航空のジャンボ機はほとんど日本人で満員。太陽を追いかけて飛ぶので日は暮れない。9時間半で14日の15時40分成田着。台風接近で雲低く今にも降り出しそうなのでタクシーを奮発して2時間で帰宅。改めてカナダの乾燥したさわやかさを思い浮べた。

今年始めのニュージーランドに比較すると，全般にニュージーランドの方が少しよかったような気がする。天候にはめぐまれたのでカナディアンロッキーは充分楽しめたがシーフードのおいしい食事ができるだろうという期待はあまり充されなかった。旅行社に払込んだ金額は1人約63万円であった。

自分が病気になってみて

中　島　恭　一

脳出血などと言う，医師として甚だ恥かしい病に倒れ，計らずも一と月を療養に費した。会長先生はじめ皆々様に御心配をおかけし，その上，望外にも多勢の先生方にお見舞いただき，心から有難く，嬉しく，紙上をかりて篤く御礼申し上げます。

この機会に，自分の病気について反省し，症状経過等を御報告申し上げます。

H.K　左半身の突然の電撃様しびれ感

H.B　父方の祖父　60歳台脳溢血にて死亡
　　父方の祖母　80歳台老衰死
　　母方の祖父　50歳台脳溢血にて死亡
　　母方の祖母　50歳台ガン（多分胃ガン）
　　父　85歳脳血栓にて死亡
　　母　50歳子宮癌にて死亡
　　兄弟姉妹　健在

V.G　幼時より呼吸器疾患を繰りかえす
　　小学5年　腎炎
　　中学2年　湿性肋膜炎
　　中学3年　脚気腫心
　　中学4年肺浸潤
　　高校1年　腸チフス
　　30歳　肺結核再発
　　50歳　高血圧。服薬により調整可

J.L　4～5日前より頭痛あり。周囲の者よりいら立ちが多いと指適されていた。睡眠は浅かった。にも拘らず血圧測定を怠ったのは医師として重大な落度であった。頭痛に対しては服薬その他で手当てしていた。

7月26日シャワーで身体をこすっても左半身の内股等に痛みを感じない。危険を察知して立上ろうとすると，軽い眩暈と共に，突然左半身の中心部に電気が走るような急激な衝撃を伴ったしびれを感じた。野郎来やがったな。と思ったので思わず「手前らにやられてたまるか。ひっこんどれえ！」と叫んでいた。然し左の指が動くので，今の内にと，急いで身体についた石けんを洗い流し，這って風呂場を脱出して，タオルを身体にまきつけ，更に廊下まで這い出して，「誰か来てくれえ」「助けてくれえ」と叫んだ。やがて家内に助けられながら，長椅子に這い上って，ふと考えた。這い出す時，手足の力に左右差がない。家人を呼ぶ声の発音が正常である。等々から脳出血ではなく，他のたとえば脳血栓か，それとも脳の炎症性の疾患かしら等と思ったが，あの急激な発症は脳出血の他は考え難く，自己診断に自信はあるのだが，その半面心がひどく動揺して，不安でならなくなる。同じ思いは，急患往診で自分の患者に病名を告げる時抱くことが多いが，その不安を幾十倍にもした様な，激しい不安である。

「何誰かに診ていただきましょう」と家内が言うのだが，「馬鹿，自分のことは自分が一番良く解っている。家の看護婦を呼べ」と私はひどく頑固だったようだ。看護婦がとんで来て血圧を測ると220/－100ある。アポプロンを打たせ，果糖とネオフィリンを静注させたが，アドナはひかえてもらった。30分後に尚210/－110だと言う。アポプロンをもう一筒皮下注させた。

ふと気がつくと，どうしたことか私の面前に，大学病院で同門だった福田先生が立っている。「先生，とりあえずこれ噛んでみて下さい」と言いながら丸く長いカプセルを私の口に入れてくれた。「どうしたんです。どうして先生が…」私はいくらか不満だった。思わぬ時に思わぬ人がいることに途迷いを覚えていた。「まあ良いから，噛みしめて下さい」「アダラートだな，さては」「まあ，そんな所です」私も自分の患者にやったことのあることを思い出して，どうして自分の時気がつかなかったのか，一寸不思議だった。アダラートを噛んでぬるぬるした液体をのみこむと，間もなく血圧は180/－90に下った。「点滴しまっせ。一寸だけアドナも入れておきまひょな」「若し血栓だったら困るなあ」「一寸だけですよ。それにこれ出血ですわ。やっぱり」「そうは思うんだけど…」「まあまかしといて下さいよ」福田先生は何とか私をなだめすかそうとしている。

どっか遠い所で家内の声がした。「先生，山根先生がお話ししたいそうです」私はその時になってすべてを諒解した。家内が私の高校の同級生の山根至二君に電話したのだ。してみると福田先生に私に内緒で電話したのも家内の仕業であろう。福田先生は東京大泉で開業しておられる。大泉からすっとんで来て下さったのだ。自分で注意していれば避けられた筈のこの事態に，循環器科医師としての誇をひどく傷つけられて，興奮している私が，家内は余程心配だったらしい。

「えっ2筒もですか。2筒。はい，そないしましょ」福田先生の声は，循環器学会で時折座長なども勤める私の同級生と言う相手に，相当の敬意を払いながら，心理的に抵抗を感じている様子である。電話が済むと「先生，山根先生がＣＴをとってみたいから，明日病院へ来てくれ言うてますけど」「要らんですよ。こうして手も動くんだから。そんな仰々しいことせんで良ろし」「そんなこと言わんと一寸行って来ましょな。折角そう言って下さるんやから」「僕は奴が苦手なんですよ」「でもやっぱりＣＴは要りまっせ。このままやと僕かて自信ないわ。一寸やから，一寸行って来て下さいな」私はやっと自分が福田先生にどれだけ迷惑をかけているのか理解することができた。そんな話をしている中に，私は眠った。どうやら2筒皮下注と言っていたのは，フェノバルビタールだったらしい。山根君はきっと「彼奴は五月蝿い奴やから，2本一ぺんにやって下さい」位のことを言ったのであろう。

醒めた時，枕許に婦長がいた。「血圧は，170/－90です」「どの位眠った」「2時間半です」「そうか。あんたもう寝て下さい。僕は大丈夫だ」それから私は不意に高校の寮歌を歌った。山根君の厄介になりに行くのが，なつかしいような，口惜しいような気持だった。「静かにして下さい。どうして歌なんか歌うんですか」「口惜しまぎれの不安かくしだ」と私は返事したそうである。歌っている内にまた眠ってしまったようだ。朝目覚めた時，広瀬先生の声がしてびっくりした。どうやら家内が広瀬先生に寝台車の手配をお願いしたらしい。広瀬先生は婦長の説明を聞きながら，一寸脈を診て下さって「大丈夫です。行ってらっしゃい。」と僕を寝台車で送り出して下さった。

同乗した看護婦に血圧を測られながら，寝台車は飯田橋の厚生年金病院へ向った。山根君はそこの循環器科部長をしている。「今どのあたりだ」「どの道を通っている」「それじゃ遠廻りじゃないか」などと私は口走っていた。一晩眠った筈なのに，まだ興奮しているのか。生まれついての饒舌なのか。

病院では山根先生が出迎えてくれて，「よう，案外元気そうやないか」その山根先生に向って私は自分の経過を縷々説明した。「話は後でまた

聞こ。とも角ＣＴとＸ線先に行って来てくれ。」

ＣＴの写真はすぐ仕上っていた。大病院の機能の良さに改めて感心した。自家では唯のレントゲンが30分はかかる。ＥＣＧは此方でとったものを提出した。

「Glücklichやねえ。Thalamus（視床）の出血や。脳外科と相談して来たが，Opはせん。出血の為周囲の組織がödematösに圧迫されとるし，Capsula interna（内包）に大部近く，再出血のおそれがある。1ヶ月の入院。絶対安静や」

「嫌だ。僕は帰る。家で安静を守る。一寸ＣＴとりに来い言うから来ただけやないか。帰えしてくれ」私は相手が友人だと思う所為か，大部威丈高に叫んだ。山根先生はおこりもせず，「君は今は医者であろうとせん。唯の患者や。医者の言うことは聞け」「欺し討ちやないか。卑怯やないか」そのあたりでまた，フェノバルビヌールをうたれたらしい。

私は何時の間にか病室の中にいた。それから五日間の気憶は余りない。小じんまりした個室であった。小便の度に身体をよじって，点滴へのケアを怠っている。と叱られた事や。大便の後始末に，息子に尻をふかれて目頭が何故か一寸熱くなった事や。やたらにライスカレーが食べたくて「ライスカレーを買って来い」「鐘撞堂の下の伊勢清が，そば弁当を売ってくれるから，それ買って来い」勝手放第な事をわめきちらしていた。

その個室はどうやら他科の病室を臨時に借りたものらしく，五日目に内科病棟に移された。今度は二人部屋であった。二人部屋に異存があったわけではないが，隣客との間を仕切るビニールカーテンが鬱陶しく，暑苦しいので，私はまた「帰ろうよ。帰って家でねていても同じだ」と，ごてはじめた。

その晩は日曜日であったのに，看護婦さんの動きがばかに慌しい。どうやら隣室の肺炎の患者さんの容態がいよいよいけなくなったのに，当直の先生との連絡が上手くいかないらしい。血圧を測りに来た看護婦さんに向って，私は僣越にも言ってしまっていた。「僕で良かったら，智恵を貸しましょうか」ぷっと吹き出した家内に，後でひどく叱られた。当直の先生が匙を投げたのかどうか知らないが，早朝にはもう山根先生が出勤して来ていて，ついでに私の様子を見に寄って，「今亡くなられたんやけど，その後でも良ければ，午前中にでも個室に移してやる。そう帰る帰ると我儘を言うなよ」と言ってくれた。

今度の個室は，内科では最高の部屋らしく，絨毯などを敷きつめ，ゆったりと広く，明るく，涼しい。代々銀行の頭取級の人々が入っていたと見え，掃除の小母さんに「お宅さんはどちらの銀行の社長さんですか」と言われてびっくりした。因みに私が退院した後は，日銀の理事をしている，やはり同級生だった友人の奥さんの父上が入ることになっているそうで，その人も何とか銀行の元頭取だという。

2週間目に2度目のＣＴ検査があり，「依然として出血層はThalamusに蟠居しているが，周囲の組織への圧迫は緩解しているし，新な出血はない」との所見で俄に起居の自由が許されるようになった。

その頃から友人達の見舞訪問が盛んになり，寂しかっただけに，大変有難く，嬉しく，こんなに大勢の良友に恵まれ支えられていたのか，と，自分と言う我儘幼稚な人間の幸運を，しみじみと感じた。就中，医師会の先生方，事務員の方，学院の方々に，次々とお見舞を受け，身の果報これに過ぐるものはありません。もう一度心から御礼申し上げる次第です。

“プレイオフ”＆“ホールインワン”

岡　田　利　介

高松宮殿下杯予選　東西　36H.S,入選32名H.D.24迄　これが，７月３日行われる筈だったが，昨夜来の雨がひどいので，開催の有無をクラブに連絡すると，今グリーンを見に行ってるとの話であったが，「俺やめるよ」と電話をきった。

猛烈であった雨もその内，小降りになり，「あれっ，行けば良かったかな」と思ったりしたが，時，既に遅しであった。

ところが２～３日すると，組合せスタート時刻表が郵送されて来た。前回のと全く同じだが，開催日だけが10日に印刷しなおされている。「あゝ矢張り中止だったのか，よかった」と闘志が湧く。

そもそも“カスミ”でのクラブの競技は，年間55回位ある。その内，大きい※印の競技は10回あり，これはクラブで組合せ及びスタート時刻を指定した競技であり，その中でも理事長杯，クラブ選手権と競ぶ３ビッグタイトル戦の一つ，でもある。

その上，時期が猛暑のため，自然に陶汰され，腕，体力共に或程度自信のある人の集りとなる。私の組はH.D.[illegible].8，10，11と私の17で何れの組も17どまりであった。

ところで10日はまた生憎の雨，然しながら今回は３日の颱風気味の雨とちがい。これでは，行かずばなるまいと参加する。

西アウトからスタート，雨合羽を着用してのバックティは非力な私にはこたえる。

昼食後雨が止んだのでシューズを取替えて東のインに行く。午前が西アウトからのため，午後は東インからとなっている。

私達の組をパスさせるため待っていた慶応医学部の教授Ｋさんや社長のＳさん，それに元最高裁の判事のＯさん，前の二人は何れもH.D.11－12で年も私の一寸上と下。「あれっ先生凄いですね。元気ですねー」と言うので（半分は冷やかし），「皆さんはどうしたのですか」と言えば，教授曰く「私はとても，とても」，社長は膝で２回りは無理なのでと言っていた。

雨中の西とちがい，東はまあまあであったが，少し無理と思い，皆の結果も見ずロッカーに引きあげシャツを取替えようとしたら右腕が痛い肘関節から前膊にかけ針金が２本入っている感じ，競技中は全然感じなかったのに。

直ぐ帰宅して入浴しマッサージをするも効なし。経皮複合消炎剤を塗る。

そして一日おいた12日㈫クラブから予選を通過した人の組合せ表が来る。あれっ俺残ったのか，皆悪かったのかと思いながら見るも私の名がない。何してやがるんだ。俺の名前ないじゃーないかと，わきをみたら予選プレイオフの組合せ表が入っていた。改めて，先程の組合せ表をみると３名空欄になっていてこれを６名で競うわけがわかった。

ところで14日㈭は，昨年から頼まれていた20名のプライベートコンペに同道のため休診にしていたが，16日㈯午前プレイオフなので，腕も労らねばならないので木曜は顔を出すだけにしてプレイをせず土曜日に備えた。と言っても練習は出来ない。

16日㈯当日は曇っていたが，雨が落ちて来ないのでいけると思った。

西アウトを出てボギー，ダボ，ボギーを次い４番のショートホール144ｍと言っても多少打ち上げ気味で前，左右はバンカーでガードされ，前のバンカーは私の丈より深いので，多少大きめに打つが十日の予選では奥に少しこぼれてパー。従って今日は加減をして打つ。ピンの手前に落ち転がっていくのが見えたが，その内，見えなくなる。ピンが左で「あれっ左おくにこぼれたかな」と思ったら，前の組の４人が拍手と

大喝采「あっ入ったのだ」と手を掲げて応える。前の組はパットをしないで待っていてくれるので，急いでカップインしたボールを取りに行く。グリーンに上ると皆がお目出度うを繰返してくれる。キャディはそのボールを受取るとこれ何処にしまいましょうかと聞く「あ・記念にとっておくものか」と思う。

あとで私達の次の組（プレイオフのもう一つの組）の人の話だと三番のロングホールでアプローチをしていたらグリーンの周りで入れ入れと言ってましたよ。そしたらワッと喚声が上ったと。

ホールインワンをすると大抵の人は「あっ大変だ」と思うそうだが，昨年東16番でこれをやった同伴のM氏落着いて曰く「私今年これで3回目ですからとすましていた。食事の時，同伴競技者の一人が何とか言っていたが黙殺されてしまった。そのあとハンカチが送られて来た。

このホールインワンはコンペではなかったと思う。ベントグリーンでグリーン手前のバンカーの土手の向側に落ちグリーンを馳け上る様に7m程転がり，入ったものだった。

さて本題に戻って，私は「あっ，入ったか」と思いまた儲けた（打数を）と思っただけ。これは狙って入るものではなく，全くの偶然なのであるから。したがって以前医師会で田渕君がこれをした時「ビールでいゝよ」と言って医師会のコンペの時一打出して貰ったことがあった。また前田君が県の医師会の時のには手拭を配ったかな。

翌日，笠間君に電話をしたら，適当に酔っぱらっていて大きな声で電話をガンガンならしてしゃべり続けそして「部長じゃねーか，派手にやれ」とハッパをかけられた。この野郎と思い記念品を200有余名分注文したし，宴会もいくつか設営させられた。

でも打数を儲けたと思うと緊張感がほぐれ，あと反ってタタイてしまい7番のショートホールではスコアが6，それでも16番のショートでバーディをとったりしたものの18番はプレッシャーがかかり，トリプルの7であったが一位に一打差で二位に入り予選を通過した。

翌17日(日)はまた雨で決勝一次は私より15歳若

クラブから記念に贈られたトロフィーにホールインワンしたボールを入れたもの

HOLE IN ONE
T. OKADA

KASUMIGASEKI C.C.
WEST NO.4 144m 5.WOOD
JULY. 16. 1983
PRINCE TAKAMATSU CUP PLAY OFF
と刻まれている。

いH.D.12の元宮様，張り切っていて雨なのに帽子も合羽も着ないでのプレー，一方私は雨に濡れると直ぐ風をひくので汗になっても合羽は必ずつける。

マッチプレーはとても疲れるが，硬式テニスのシングル戦で鍛え，駆け引きを磨いた老齢とは言え往年の猛者(？)（決勝に残った32名中，大正一桁は私一人，二桁が3～4人あとは昭和，それも10年前後の人が大体）

雨中の熱戦は18ホール目で追いつかれた。18番ロングの2打目附近で，後続組で決着のついた2人が歩いて来る。こういうのはどうもマナーが悪くて困まる。ラフを通って行くべきなのに皆，昭和生れ仲間。「どうですKさん」と寄って来る。あちらのプラスにはなっても，こちらはマイナス。「入って来て失礼じゃないか」と言えばあと味が悪い。仕方がない「ギャラリーは早くあっちへ行ってヨ」と追い払うしかない。でも少し先のラフで2人ふり返って見ている。案の定チョロ。3オンならずバンカーで負けてプレイオフ。依然雨は止まず。

19ホール私は3オンを奥に30cmこぼしワンパットの位置につけて相手を待つ，彼はピン迄50ヤードの好位置からのアプローチ，ここまで書いて気がついたが彼が3打のアプローチをしていないのに私がグリーン奥迄行ったのか，そしてその間彼は何をしていたのか。でも1パットに寄せる自信があったので躊躇なく強行した。

これで彼がワンパットに寄せれば私の負け。ツーパットなら20ホール目に向うわけ。丹念に素振りをしている。長すぎるなーと思っていたら果して，強すぎてグリーンオーバー「しめた。」（こういうことを言っては不可ません）作戦はあたった。2～3m下に落とし，これがタップリの雨で寄らず私が勝ち，残り16名に入った。

かなりの雨のなか合羽を着て真剣な19ホール。食堂に上って合羽を脱ぎ凄い汗に我れながら驚く。先程の2人食事をしていて私をみて，おこられちゃったよと笑っていた。

昨日に続いてこの今日なので肘が痛い。食事が済んでも直らないので，自分のゴルフができないと思い残念ながら午後の2次戦は棄権した。

敗けを大変くやしがっていたKさん棄権をするのなら自分に譲ればいいじゃないかと思った様な様子に感じられもしたがそれとこれは別と考えたい。

帰宅して入浴する。身体中ピリピリしみる。何と半日で合羽のために上半身全部に汗もができてしまっている。でも心地よい気分に浸れた。

もう一回ホールインワンについて言えば，今でも特別嬉しいとは思っていない。たゞこれで一人前になれたと言う気がするだけ。

ホールイワン達成お目出度うとよく言われ，品物に入れる挨拶状にも最初，達成と書いたが，達成とは成しとげること，目的を達し成功することとあり（広辞苑），従って努力精進の末のものものではなく全くのアクシデントであるから，ホールインワンを出しましたと書いた。

いつもショートホールのティグランドでは乗ってくれと願って打つだけで，直接入れようなんてことは考えたこともなかった。

でも笠間君ではないが，お目出度いのであるから，いつもお世話になっている方達にもと思って記念品を注文した。その内，お手許に届いた方は彼奴も一人前になったかと思って頂き度い。

最後に私は大正一桁では一人出場し予選それもプレイオフをして残り，ホールインワンの副産物迄つくり，一次戦ではこれまたプレイオフで残り16名に入れた幸運と元気さを誉め称えてほしい。残念なのは一次，二次が午前，午後三次，準決勝も同日。日とプレイが強行されていること。こんなこと言うと馬鹿年寄は出る幕じゃないと叱られる。承知で出たんだろうと。

それにしても負け惜しみではないが普段バックで2Rしても何ともないのに予選の時はどうして痛くなったかわからない。それも一ヶ月以上も続いているとは。

そして，何と言ってもホールインワンより，大きいタイトル戦に久し振りにある程度残れたことが嬉しかった。今日も颱風気味の雨の中を盛夏杯に出てきたが予選で痛めた肘が未だ駄目。1Rで帰り，お盆で遊びに来ている長女，二女と孫4人と一緒に心臓でアメリカに留学している婿，三女，孫に電話をする。金がないのだろう2人のつかっていたゴルフバッグを送れと。

あちらの方が安いだろうに。

二女の時は東海岸（ニューヨークの上）で不便だったが三女の方はシスコのスタンフォード大学なので銀行も日本ので送金も国内と同じに簡単にいく。

孫はあちらの小学校に通ってるらしいが，母親が朝一寸おそくなると早く行こうよと催促するようで，まあよかったと思っている。昨年の9月に来た子が日本人としては1人で，孫に色々教えてくれるそうだ。

何んだかんだと，つっぱってみても，家に帰れば本当にヂー様だ。

8－14－1983　記

追記　8月17日夕方，一ヶ月前に注文したタルが出来上って来る。私の名前が，ごつく入れてあり驚ろく。横文字の方は全部指示したのだが自分の名前を入れることを忘れてしまう。それで大きさを言わなかった点，大失敗。次回には（つもり）スマートにしますから御寛容の程を。

21日頃から，記念品に対するお礼と祝いの電話やハガキ，それに封書が続々と言う位来る。達成と言って下さる人も多いしまた快挙ともちあげてくれる方もかなりいた。

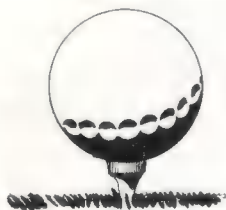
それに祝品を持参でいらっしゃって下さる方も予想外に多く感激したり驚ろいたり。

恐縮したのはゴルフ部の先生ご自身で重いのにお祝いを持って来て下さった。この先生その内きっとホールインワンを出すよ。そしたら今度は私が行かなくちゃ。

何百kmの所を電話をくれる人も数人いて，こうなるとフロックだ嬉しくないなんて言っていられなくなってしまい嬉しい限りになるから老人なんて他愛ないもの。

二，三日前，赤飯が出来たので何だと思ったら，家内曰く「こう皆さんに祝福されては本当にお目出度いのだから，家でも祝った」のだと。

よしっと21日の月例それにまた今日(28日)も出かけたが，まだ腕の痛みがとれず思うように行かない。それでもゴルフ場通いのスケジュールで一杯だ。

8－28－1983　記

=こ=の=道=2=年=

深　田　弘　治

限りなく広がる芝生の上で快音を響かせて白球を打つゴルフの素晴らしさは何とも言えず表現の仕様もないくらいです。

それまでの私もそうであったように、経験のない人はテレビなどで活躍するプロゴルファーの姿を見て或はあんなに優雅で簡単なスポーツはないと思うかもしれません。然しこの快音を得ることが実に非常に難かしいことでこの目的達成の為には大変な努力と精進が必要なのです。

私がゴルフのクラブを握ってから2年余りになりますがまだ胸のすくような快音を残すボールは打てません。けれども何とか努力の甲斐あって、過日3度目の月例出場でオフイシャルHCが25になったのを機会に私の思い出を記してみたいと思います。

何度かいろいろの方面の人達からすすめられましたが取っ付きずらいのとおっくうなのでためらっておりましたが、医師会の松江方面の旅行から帰ってから、期するところがありようやく重い腰を上げることとなりました。

早速兄の古くなったクラブを何本か貰い受けて近くの練習場へ行きました。年の暮も迫った12月中頃のことです。ゴルフは基本が大切だということで先ずはレッスンプロのKさんについて習うことにしました。最初はクラブの握り方から丁寧に教えて貰って、言われた通り握ってみましたが、意外にクラブの重いことに気付き力一杯ふればふるほど当りません。結局150個のボールを打って50m以上飛んだのは2～3発で、冬だというのに全身流れる汗で革の手袋の中もびっしょり、頭からは陽気が立つ始末。本日はここまでと言われたときは両手にマメが数個、表皮もむけて誠に無残な姿でした。翌日は全身の筋肉痛で診療にも差支えるほどでしたがこんなことでへこたれてなるかとそれからは連日庭で空振りの練習が始まり、昼休みになるとせっせと練習場の通い、Kさんからほめられましたが一向にボールは当りません。近くの席で練習している人達がやたらと上手に見え、焦りが出てますます当らなくなります。一生懸命振っても、今のスイングはとてもよかったと言われても狙ったボールはセットされたままで微動だにしない空振りのときは悔しいやら切ないやら言いようのない挫折感で情けなくなりました。

来る日も来る日も練習場へ通い正月もすぎた或る日、何気なく振った7番でボールが100mの標識を越えたときは飛び上って喜んだものです。然しその後は相変らずでやがて左肩関節周囲炎がおこりだし痛みのために思うようにクラブが振れないまま色々と工夫しながら練習を重ね、何冊か本も読んでみましたが、一向に上達の気配はありません。この間にも汗をかくことに変りなく体重は減らぬのに腹囲が15cmも短かくなり毎晩飲むビールばかりがやたらと美味しくなりました。

3月に入って桜の便りも聞かれる頃から少しずつ当り出しましたが、教科書通りに打つと皆ボールがサードゴロになってしまい、どのクラブを使っても飛ぶ距離と方向は同じです。

やがてバッフィーの頸部のビニールもほつれだし、子供の工作道具の中からこっそりセメダインを借用してはりつけては振り回わすこともありました。

やがてコースへ出るようになりましたが、何とも不器用な姿にキャディさん達も気の毒で見てはいられないと言うのが実感だったようです。或る日「先生もっと数を打ちゃ当るようになりますよ。」と慰めてくれる人もおりましたが何と言っても私を勇気づけたのは友人のSさんの、「私だってもうダンプカーに2～3杯は打っているんだから……。まあ黙ってダンプカー一杯位は打ってみて下さい。身体で覚えなくちゃあ

……。」と言う言葉でした。十数年以上の経験者でシングルの彼がと当時は疑ってみましたが、そう言われれば100個のボールは洗面器に一杯です。リヤカー一杯のボールを打つのさえ容易なことではありません。

医師会コンペの初出場は那須国際ＣＣでした。２日酔と不眠で体調不十分でしたが、午前中70で回わってロストボール３個は当時の私としては上来出でした。岡田御大からはネットで100が切れれば大したものだとほめられました。

以後月に２～３回入間ＣＣへ通うようになり何とか友人達の後をついて行けるようになりましたが、永い永いトンネルに入ったままで、手さぐりの１年以上が過ぎたように思います。

昨年霞ヶ関ＣＣで行われた医師会の記念大会では未だオフィシャルもとれなかった私がＨＣ20になったときは本当にびっくりしました。

過日練習場で同僚のＹ君と出合いました。彼はクラブを握って丁度半年だとか、一生懸命練習している彼を見るにつけ、２年前の自分の姿を思い浮べて万感胸に迫るものがありました。

スポーツに限らずどんなことでもその道に入って少しでも究めようとすると限りない深さと壁に突き当るものです。ゴルフがこんなに難しい、全身の智と力をふりしぼるスポーツだとは考えてもみなかったことで改めて脱帽してしまいました。

今日こそはと胸を躍らせて出かけるのですが思うようにならずがっくりして帰って来るのがいつもの例です。何十年来の運動不足の積み重ねとしのび寄る老化現象に逆らいつつも、どうせ趣味で始めたことだからと心の片隅に言い訳けの小袋をおいたまま、一方では未だダンプカーどころかリヤカー３杯も打っていない自分にゴルフってそんなに甘いものではないよと言い聞かせながら、これからも目的のＡクラス入りを目指して努力しようとひそかに闘志を燃やす此頃です。

(58. 7. 24)

茂　来　山

高　橋　一　二

余り人に知られていない山だと思いますが、標高 1,718m、長野県佐久町にありますから、小梅線沿線の山と言うことになりましょうか。

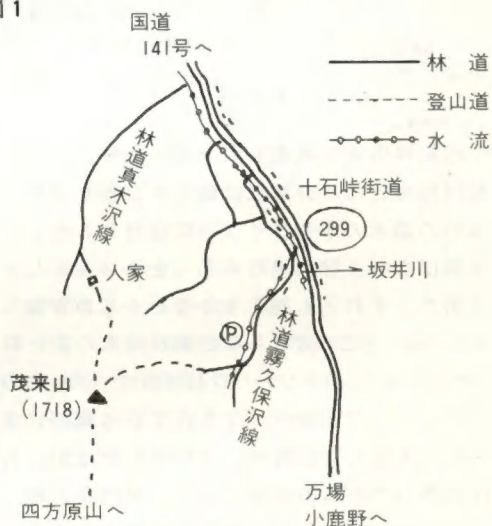
電車利用なら羽黒下駅で降りますが、近くには農村医学で有名な、佐久総合病院があります。

5月下旬の日曜日、朝4時半に家を出ました。一路十石峠街道を目指し国道299号線を走りますが、正丸峠の下をトンネルが開通し、可成り時間が短縮されるようになりました。志賀坂峠を越え、中里村で鬼石からの県道と合流して暫らくは舗装道路ですが、右に下仁田方面、左に武道峠への道を分ける所から細い砂利道となります。国道とは名ばかり、凹凸の激しい路肩のくづれた悪路です。登山口近くの一寸した広場に着いたのが7時半、既に3台程車があります。長野、多摩、山梨ナンバーで、登山者ではなく釣りでもなし、山菜取りか、いや休猟中の山に入る密猟者のような感じです。5～60m位離れた処から5～6人がこちらをうかがっている様子です。

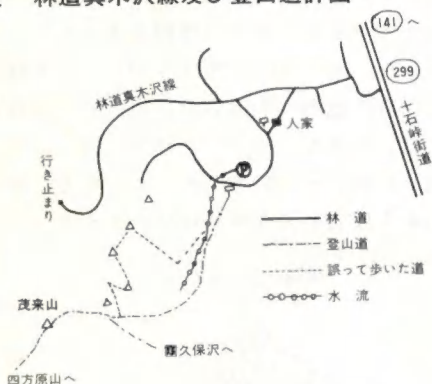
さて登山道ですが、駐車地点に標識があり真直ぐ上を指しています。5分程歩くと二股に分かれ、登山道らしいのは左で、右は巾広い新しい林道で立派な橋がかかっております。標識がありませんので当然のように右の道をそのまま歩きましたが、幾らも歩かないうちに行き止まりです。川を渡るようなところもありません。一度引返して左の林道に入り、暫らく歩いてみましたがそれらしい処もなく、またまた先程の行き止まりの道に入り、登山道を探します。

「ハッパ注意」の看板の上の方に、か細い踏み跡らしきものあり、登ってみますと上へと道がはっきりしているようです。然し茂来山とは段々離れて行くように思えます。道は次第にはっきりして来て、途中山の神の祠もあります。1時間程歩いて「矢張り此の道は茂来山の登山道とは違う」と自分に言い聞かせて引返すことにしました。此の日は30度を越す暑い日で、すっかり汗だくになってしまいました。後で地元の人に聞いたところでは、左の林道を更に上がると右に茂来山の標識があるとのことでした。

結局この日は登山をあきらめ、別方向からの林道の下見をし、帰路は関越高速を利用して帰りました。もっとよく地図を調べてくればよかった、登山標識を間違い易い処に立てて呉れなくては、林道が上へ上へと延びて来る昨今、登山道が分断されて段々分りにくくなる。等々、文句やら反省やらを車の中でつぶやきながら。

図１

6月4日。更に早く家を出て、今度は往路に関越高速道を利用、国道254から141号を南下、先日とは逆に十石峠街道に入り林道に向かいます。人里離れた一軒家までは下見してありましたが、その時人家の更に上を林道が走っていて、そこに茂来山への案内板がありましたので、人家を目あてに林道を走りますが、幾ら走っても家の上には出ません。1図のような簡単なものではありませんで、幾本にも枝分れしています。

その内、行き止まりになりました。二度三度往き来してから、思いきって石のゴロゴロした如何にもそれらしくない道に入って5分もすると砂利の新しい良い道と変り、ポカッと人家の上に出ました。更に林道は奥へと続きます。可成り走ってから一寸した広場に出て、そこにまた案内標が立っています。やっと一安心、愈々登山開始。時刻は6時15分、道は判然しています。10分程で道は2分します。右側の沢を渡る方が広くはっきりしていて、左側は湿地の細い道です。何の疑いもなく右に入りました。然し左側が正規の登山道でした。

図2　林道真木沢線及び登山道詳図

始めは広かった道も段々細くなり、そのうち踏跡程度となり、遂には植えたばかりと思われる杉の苗木の中を歩くようになりました。こんな筈はない、登山道ならもっとちゃんとしている筈だ。それとも誰も歩かないから草が繁ってきたのか。ところどころ草が倒れて人の歩いた様子があります。首をひねりひねり歩くうち、木の幹に赤いテープが巻きつけられている場所に来ました。矢張り登山道か。赤いテープは30m おき位についているのが見えます。尾根を目指して急道です。尾根に着いて道を間違えたことがはっきりしました。赤いテープは下に向かって巻きつけてあります。今となっては引返す気にはなれません。尾根を外さずに歩けばなんとかなると自分に言い聞かせつつ、木をかき分け、岩を登り、ともすれば谷に下りがちな自分の足を上に向けさせ歩くこと小1時間、やっと展望のきく広い岩場に到着、遅い朝食となりました。茂来山頂らしき峯まであと2時間位かと思われます。八ヶ岳の残雪が美しく望まれます。蚊の

茂　来　山　山　頂

多いのに驚ろきました。数十匹、ブンブンうなりながら囲りを飛び交い、落着いて食事も出来ません。展望も食事も程々に、動き出します。岩が急で、どうしても尾根に出られない箇所が2～3ヶ所ありましたでしょうか、岩場を廻り込む内、いつの間にか谷に入りこんでいます。猟師か山師がこの辺を歩いているのでしょう。

山頂より八ヶ岳を望む

か細い道が谷に向かってついており、道を拾って歩いているうちに自然と谷に下り、自分の足も意に反して楽な下りについて行くのです。「道を失なったら尾根に出よ」は山歩きの鉄則です。ハッと気付いた時は大分下っている。1～2度繰返すうち、思いきって岩場を急登しました。明るい尾根に出た途端、茂来山登山道、山頂まで0.3㎞の案内板があるではありませんか。走るようにして山頂を目指します。項上着8時55分、普通は1時間少々で着くのでしょうから、休憩時間を差し引いても2時間以上余計かかったことになります。山頂の展望は360度ですが、既にもやがかかっていて、南に御座山がかすかに見え、西に八ヶ岳から浅間山が見えます。東北方面は殆んど見えません。山頂も蚊が多く、ゆっくり出来ません。手早く周囲をフィルムに

収め、何時ものようにセルフタイマーで自身を写し下山にうつりました。この間約5～6分。石楠花が咲いているかと期待していたのですが1本もなし。みつ葉つつじがところどころにある程度。30分程下って6人1組のパーティに会っただけの人気の少ない山でした。更に下って蚊のいない沢の流れの傍で始めての大休止。お茶をのみ、ラーメンを食べ心ゆく迄休みます。これも山歩きの醍醐味の一つ。朝に間違えた分岐まで下ってみると、かたわらの木に小さく茂来山登山道と打ちつけてあります。やれやれ、もっと分りやすい所に書いてくれればいいのに。ブツブツ言いながら車についたのが10時半。国道141号を更に韮崎方面へ南下、小海駅前を通り武道峠径由、299号線に合流、二子山附近で昼食、帰宅は3時になりました。武道峠の道は十石峠のそれより地盤が固く、路肩のくずれも少なく、遥かに走り易いように思えます。展望も幾らかすぐれています。その分車も幾らか多いでしょうか。

＝会　議　記　録＝

○第3回　定例理事会　6月24日(金)

1．県医師会理事会会議報告
2．医療講演会開催について
3．埼玉県医師会学術講演会及び川越市医師会学術講演会予定について（昭和58年度）
4．老人保健連絡協議会委員会開催について
5．入会金の件について
6．川越市医師会報掲載について
7．学院運営について
8．十日会日程について
9．夏期手当支給日について

○学術委員会　6月1日(水)
昭和58年度学術講座予定について

○学術委員会　6月16日(木)
行天良雄先生講演実施について

○3師会麻雀大会　6月19日(月)
医師会側（11名）　個人優勝　広沢先生

○老人保健連絡協議会　6月28日(火)
川越保健所

○学術委員会　6月30日(木)
医療講演会実施について

○第4回　定例理事会　7月22日(金)

1．全理事会会議報告
2．老人保健法における保健事業の実施について
3．川越市医療問題協議委員の選出について
4．保険相談会の再指導について
5．所得補償保険加入促進及び説明会開催の依頼について
6．労災医療部会理事会報告
7．医師会事務職員採用について
8．高看運営に関する事項について
9．入会金の件について
10．医師会事務所休業日について
7月29日(金)～7月30日(土)

○高看運営会議　7月8日(金)

○高看修学旅行　7月13日～7月16日
北海道（道南）

○医療講演会　7月19日(火)
会場　埼玉県川越福祉センター5階講堂
講師　NHKチーフディレクター行天良雄先生
内容　医療法改正の展望と私的医療機関のあり方について（出席44名）

○十日会　7月11日(月)

○老人医療協議会　7月20日(水)
市庁側4名　医師会6名

○第5回　定例理事会　8月26日(金)

1．全理事会会議報告
2．郡市保険担当理事合同会議報告
3．第2回地域健康教室の開催について
4．老人保健法の医療以外の保健事業に関する契約書について（案）
5．講師派遣依頼について
川越市歯科医師会に対して
9月17日(土)予防歯科センター
6．川越市医師会災害時の救護班及び電話網について
県公立学校の学校医の公務災害に関する条例の政正について
185,000円 → 205,000円に引き上げ
8．第36回埼玉県医師会創立記念表彰に関して

9．退会会員について

A1 篠原秀隆先生（元広栄診療所）7月1日付

B2．山下　昇先生 ｝（霞ヶ関中央病院）
　　小峰妙子先生 ｝ 8月1日付

10．十日会の日程について　9月13日(火)

11．その他

①医師所得補償説明

②日帰旅行について　11月中旬

○医師会七夕納涼大会

日時　8月7日(月)　17時～20時

会場　平安閣（川越）

川越市医師会側　30名出席

○学術講演会　8月23日(火)

出席者26名　会場　川越市医師会

編集後記

今年の夏は地震による津波，台風による水害と暗いニュースが続きましたが，9月に入って追い打ちをかけるように大韓機撃墜事件が我々の耳目を集めました。あらためて日本近海の緊迫した状態と外国の自国，国家を守ることのきびしさを思い知らされました。以前読んだ“長いナイフの夜„という小説を彷彿させました。これは6人のドイツ青年がナチ親衛隊に入隊し，ヒトラー絶対服従の教育を受け，ユダヤ人はもとより，上司，同僚と言えども，総統に反対するものは情容赦なく，平然と殺りくをくり返してゆく過程が書かれた小説です。

一方この事件に対するマスコミの報道が事件直後から誠に冷静なのに感心しました。，“ソ連側に責任ある問題処理を求める一方，対ソ問題全般には冷静な姿勢で臨むのが賢明な道であろう„（9月3日社説）“御家族の悲しみは充分にお察し致しますが，何せ世界の緊張状態の接点で起った事件ゆえその背景を充分に考慮して対処しなければならないと思います„（同，ニュースセンター結語）

常日頃，医療事情，医療問題には事の外厳しい報道を流し続けているマスコミのあまりに物わかりのよい報道ぶりに上げた手のやり場に困るようでした。なにも賢明な道や，対処の方法まで今の時点で教わらなくてもよく，今のような平和な時代に条件はどうあれ，これ程黒白のはっきりした事件はないように思われ，“もやもや病„ではありませんが，どうもすっきりしない何日かです。

日本はコンセンサスの社会と言われておりますが，我々一般に影響の大きいマスコミのみなさんには医療事情についてももっと冷静に，物わかりよくなってはもらえないものだろうか？問題によって筆を使い分けるようではますますコンフュージョンの社会になってしまうのではないでしょうか。

◇◇◇

今月も沢山の御投稿ありがとうございました。表紙は西川先生から昼の部と夜の部の2枚いただきましたが，昼の部を載せました。

次号は11月末締切りで，新年に皆様にとゞくことになります。御投稿よろしくお願い致します。

（片岡）

川越市医師会報　第44号

昭和58年10月1日　発行

発行責任者　島　田　昌　治

編集責任者　高　橋　一　二

発行所　川越市医師会

川越市西小仙波町1の8の1

電話（0492）22－0794番

印刷所　小沢写真印刷株式会社